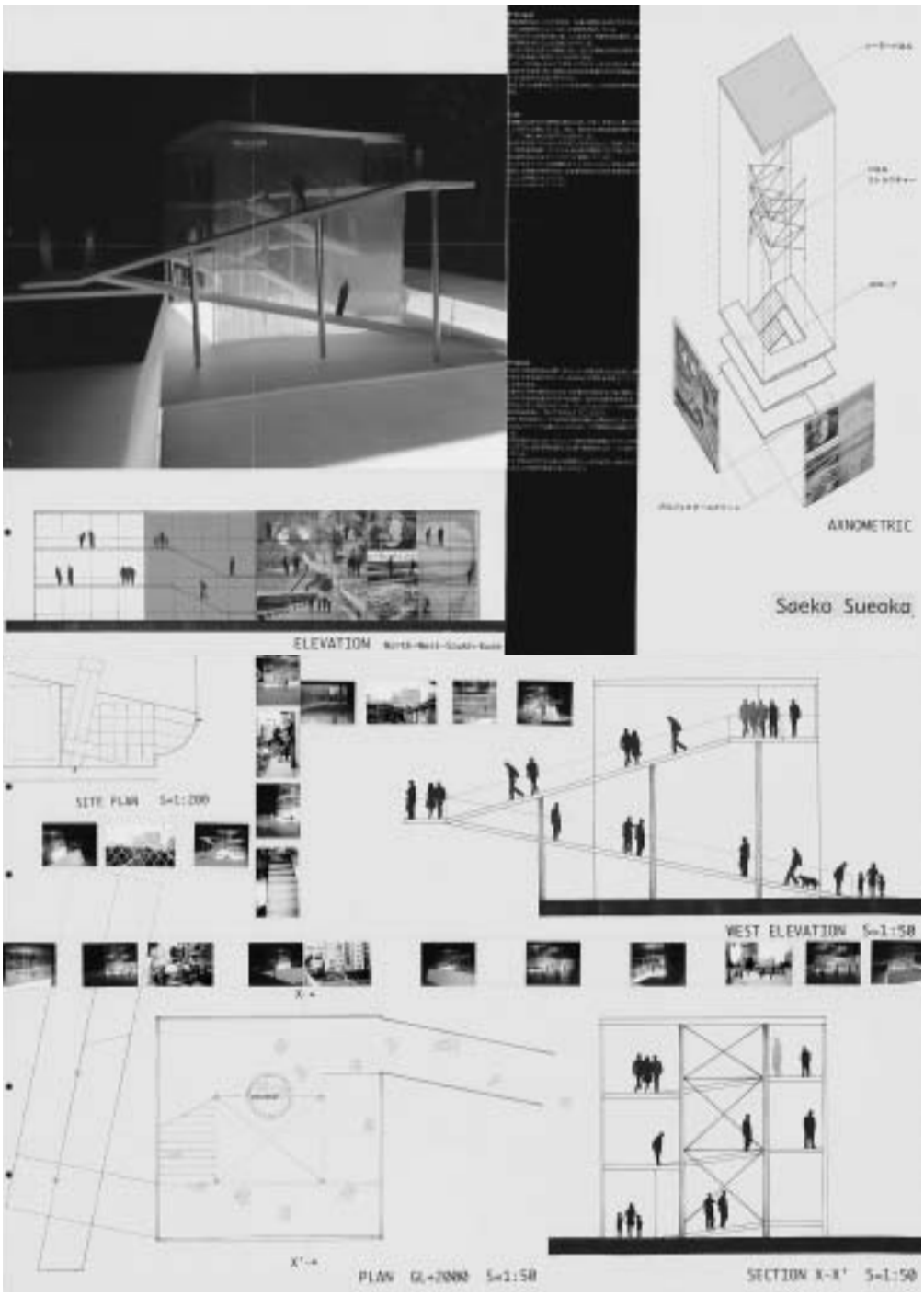


末岡　佐江子

建築設計製図Ⅰ

第３課題：Ｂ
パブリック・スペース

２年１組

担当：
野村　歓
若色　峰郎
小川　守之
小松　清路
杉　千春
田島　夏樹
田中　雅美

末岡　佐江子

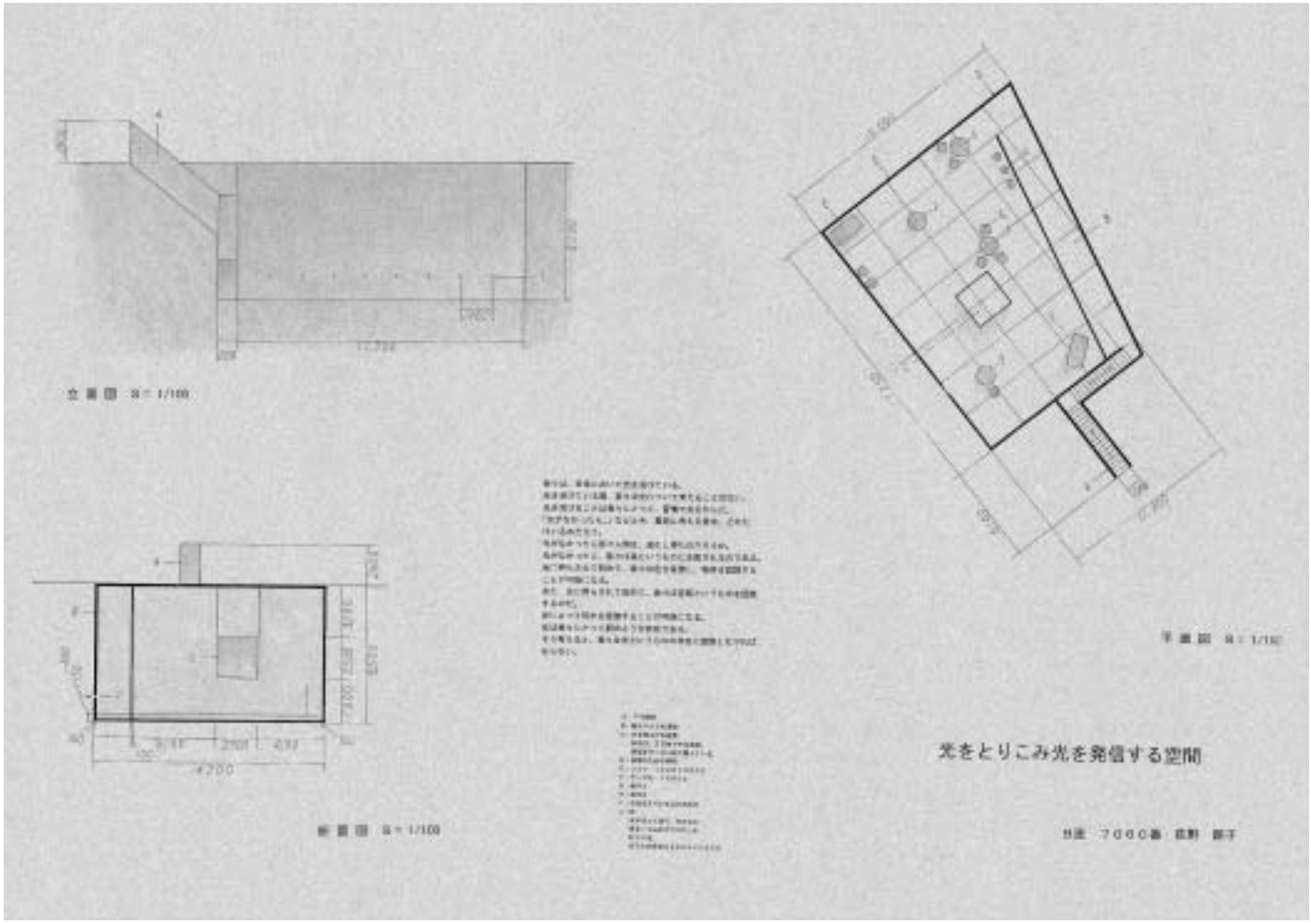
大学・オフィスビルの多いここお茶の水は、大勢の駅から目的地へと向かう人の流れがある。しかし人々は足早ですれ違う人のことを気にすることはない。そこで、人の流れを引き込み、情報の提供と交流、そして休憩のできる空間を提案した。人々は、スクリーンから映される映像によって内部の様子を知り、もっと詳しく知るために内部へと流れていくだろう。

指導＝杉　千春

お茶の水の交差点に、公共空間としてのある機能をもった施設を計画する。この課題で提出された作品は公園や展望、休憩施設のようなものが大勢を占めましたが、その多くは公共性ということや都市に対する明確な視点を持つまでに至らず、抽象的な空間構成のようになっていました。これは課題内容に対して、時間的な制約がちょっときつかったためなのかもしれません。なかには問題意識を持ちながらも検討時間が追い付かず、途中で放り出してさらっとまとめてしまったような作品があり、悔やまれました。

Academic Junctionとタイトルされた末岡さんの作品は、この場所を学生をメインとした人々の情報交換の場と位置付けています。建物を様々な情報やアクティビティを発信、増幅するための装置と考え、お茶の水という街を再定義しようとしたものです。建物自体は単純なボックス形状ですが、外部の壁が半透明のプロジェクタースクリーンであったり、展望ブリッジへと続くスロープギャラリーやパネルストラクチャー等の仕掛けによって、活発な情報交換が行われるように考えられています。そしてそれらが建築物として自立したシステムとなるような設備装置を備えることで、この建築物の意義を明確にアピールしようとしています。この場所で発信される情報や人々のアクティビティが風景となり、街を創ってゆくという考え方は目新しいものではありませんが、全体がバランスよくまとめられていることと繊細なプレゼンテーションが評価されました。

荻野　朗子



建築設計製図Ⅰ

第３課題：B
パブリック・スペース

２年２組

担当：
宇杉　和夫
石田　道孝
本杉　省三
川口　とし子
白井　勇
白江　龍三
山崎　敬三

荻野　朗子
都市というパブリック空間でのプライベート空間獲得の必要性をテーマにした。そのための空間は隠れ家的存在でなければならず、非利用者の目に利用者のプライベートを見せる必要はないから余計な装飾物は要らないという考えから地上は無にした。
地下はプライベートに集中できるよう一面水で、昼間は微小の光をとりこみ、夜は微小の光を発信する。そこに椅子、ソファ、テーブルを常備、各人は好きなように使用する。

指導＝川口　とし子
彼女の姿勢は実にうれしい……しょっぱなのトレース課題（前川邸）でも、図面の書き込みの旧漢字まで質問してくるという真摯さ……。基本を押さえ、なおかつアーティスティックであろうとすることは簡単でないけれど、創造することの、生きることの本質だと思います。これからますます入ってくる情報も増え、迷い、試行錯誤することと思います。キャパシティーを広げ、かつニュートラルに自己を深めていってくれたらいいなと思います。
パブリック・スペースの課題では、わが班はかなり自由度の高い範囲でトライしてもらいました。彼女は確か……私の印象では〈クラブ〉のような待ち合わせスペースをイメージしていたようです。でも、その先に彼女のテーマ『光』があったのです。彼女の説明はまだまだ舌足らずです。でも「光をとりこみ光を発信する空間」という本課題「パブリック・スペース」への読みには、ニュートラルなポジティブさが感じられ実にうれしい。
最後に、彼女の姿勢で実にうれしいのは「つくること」である。それが周囲に好奇心と期待をまきおこす。デザインすること、クリエイトすることの一歩はまずここであり、この一歩一歩をいかに味わって前進することができるか……とにかく未来はひらかれている。

鈴木　貴子

鈴木　貴子

本計画は、煩雑で人の密集する駅の所で落ち着くことができる隠れ家的存在、公の空間だが、個人の空間である場所を提案する。これは、個人・孤立＝冷たいの中に「暖」・「穏」を吹き込むために、円形で構成し、素材に竹を選び、竹と竹との間の小さな隙間により全くの密閉を避け、光の差し込みや風の通り抜けにより、落ち着き・安らぎを可能にした。

指導＝白江　龍三

都市の公の空間における個という逆説的なテーマ設定、土と竹というナチュラルで仮設的な素材の採用、簡潔でセンスのよいプレゼンテーションなど、最近の建築のトレンドと時代風潮を巧みに読みながら、自らのテイストで美しくまとめている。一見無邪気で、ややもすると無思慮な提案に見えがちな作品だが、風雨に対するシェルター機能を持たない建築物の提案や耐久性のない素材の採用など、ここに至るには乗り越えなくてはならない幾つかの精神的ハードルがある。計画途中では屋根のない円筒空間にこだわるほかは明確な方向性が見出せない時期があったが、最終的にはキッパリとした割り切りをもって屈託ない作品にまとめあげた。
この案は期間限定の季節的なフォーリーとしてならば、実際に建設されても都市のさわやかなモニュメントとして機能するはずだ。この課題では、小さな敷地（点）を操作することで、都市（敷地を超えた広がりのある面）に影響を及ぼすような提案を期待している。鈴木さんの案は都市に異物（土と竹）を挿入することで、視覚的にこの目的を達成しているが、一方で、雑多な精神状況の人々が溢れる都市空間の中に、ちょっと個の時間がほしくなった人達を吸い寄せる装置を作ることで、見えない心のランドスケープを形成している。機能を切り捨てて心の建築に特化したことで、この点がさらに際だっている。鈴木さんの感受性の豊かさと大胆さを評価したい。